

須玖岡本遺跡出土ガラス小玉の調査：故岡部養逸氏 旧蔵中山平次郎先生関係資料概要報告(2)

谷澤， 亜里
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/26498>

出版情報：九州大学総合研究博物館研究報告．10， pp.69-78， 2012-03．九州大学総合研究博物館
バージョン：
権利関係：



須玖岡本遺跡出土ガラス小玉の調査 —故岡部養逸氏旧蔵中山平次郎先生関係資料概要報告(2)—

谷澤亜里

A research on the glass beads from the Sugu-Okamoto site
- A report on the late Professor NAKAYAMA Heijirou Archaeological Collection, formerly
owned by the late Dr.OKABE Yoitsu -

Ari TANIZAWA

九州大学大学院比較社会文化学府：〒 819-0395 福岡市西区元岡 744
Kyushu University Graduate School of Social and Cultural Studies : Motooka744, Nishi-ku, Fukuoka, 819-0395, Japan

1. 調査に至る経緯

本稿は、中山平次郎先生が考古学雑誌に報告した須玖岡本遺跡出土ガラス小玉(中山1920a)の追調査報告である。本資料は、2007年に、多数の中山先生関連資料と共に九州大学総合研究博物館に寄贈され、その概要が報告された(岩永2008)。当初、ガラス小玉はガラス窓付き小型金属ケースに収められた状態で、報告はガラスケース越しの観察によっていたが、その後、蓋を開封することができた為、今回、追調査と報告を行う運びとなった。

2. 資料と方法

資料の概要

先述の通り、本資料は、当初はガラス窓付き小型金属ケースに収められており、「筑前國筑紫郡春日村大字須玖字岡本発掘 一甕棺より朱交りの土に混して出でしもの 大正九年 考古学雑誌十一ノ一に報告」との紙ラベルを伴っていた。ガラスケース越しの観察では、破片も含めて53点が確認されていた(岩永2008, p.111)が、蓋の開封後、微小な破片も含めて56点が認められた。遺物番号は開封時の破片毎に付与したが、接合関係を検討した結果、30個体と破片24点が確認された。

中山先生の報告では、「青き硝子製の小玉にして、之れ亦口を合せたる大甕の内より朱交りの土に混じて発見せられ、村人の一人が此土を大甕破片と共に保存し置きたるなり。」「尚此土塊のうちには甕破片の内面に固著せるものありて、この土塊よりも玉を出し、含玉の朱交りの土が大甕の内部にありたりとの談話は十分に信用するを得たり。」「小玉の外此土塊よりは他の遺物を出さざりしといふ。」(中山1920a, p.9)とある。甕棺片の実測図も示されており(図1)、弥生時代後

期前半のものと考えられる。

方法

ガラス小玉には、いくつかの製作技法があり、内部の気泡・不純物の配置や、全体的な形状、孔内面の状態等からの判別が可能である(e.g. 大賀2002a・b)。また、近年では材質の理化学的調査事例の蓄積により、基礎ガラスと着色剤が類型化され、両者の相関関係や、着色剤と肉眼的な色調の変異との対応関係が明らかとなった(e.g. 肥塚1995; 肥塚ほか2010)。また、材質と製作技法との相関関係、その時期的変遷・分布の傾向も明らかにされつつある(大賀2002a・b,2003; 谷澤2011)。

以上をふまえて、材質の推定と製作技法の判別を目的に、肉眼観察と、落斜光下・透過光下における顕微鏡観察を行った。材質に関しては、肥塚隆保氏の枠組みを用いる(肥塚1995; 肥塚ほか2010)。また、法量について、直径と厚さの最大値と最小値をノギスを用いて1/20mm単位で計測した。

表 1 ガラス小玉の法量一覧

番号	残存状況	色調	最大径	最小径	最大厚	最小厚	番号	残存状況	色調	最大径	最小径	最大厚	最小厚
1	完形	淡青色	3.55	3.3	1.9	1.6	28	完形	淡青色	3.4	3.1	-	-
2	完形	淡青色	3.45	-	2.4	2.15	29・30	完形に接合	淡青色	3.5	3.4	3	-
3	完形	淡青色	3.55	3.4	2.7	-	31・32	完形に接合	淡青色	3.35	-	2.6	-
4	完形	淡青色	3.2	-	2.2	1.75	33	1/2	淡青色	-	-	-	3.25
5	完形	淡青色	3	-	2.3	-	34	1/2	淡青色	-	-	-	2.55
6	完形	淡青色	3.5	3.05	2.15	-	35	1/2	淡青色	-	-	-	2.95
7	完形	淡青色	3.35	3.2	2.45	2.3	36	1/2	淡青色	-	-	-	2.7
8	完形	淡青色	3.65	3.45	2.8	(欠け)	37	1/2	淡青色	-	-	-	2.2
9	完形	淡青色	3.55	3.3	2.6	2.1	38	1/2	淡青色	-	-	-	3.2
10	完形	淡青色	3.1	2.9	3.45	3.25	39	1/2	淡青色	-	-	-	2.4
11	完形	淡青色	3.4	3.2	3.55	3.5	40	1/2	淡青色	-	-	-	1.95
12	完形	淡青色	3.95	3.7	3.7	3.4	41	1/2	淡青色	-	-	-	2.45
13	完形	淡青色	3.6	3.45	3.1	3	42	1/2	淡青色	-	-	-	1.9
14	完形	淡青色	3.75	3.6	2.2	2.15	43	1/2	淡青色	-	-	-	2.05
15	完形	淡青色	3.55	3.3	2.6	-	44	1/2	淡青色	-	-	-	2.4
16	完形	淡青色	3.4	3.25	3.2	3.1	45	小片	淡青色	-	-	-	-
17	完形	淡青色	3.5	3.4	2.1	1.9	46	小片	淡青色	-	-	-	-
18	完形	淡青色	3.6	3.2	2.7	(欠け)	47	小片	淡青色	-	-	-	-
19	完形	淡青色	3	2.75	2.5	2.4	48	小片	淡青色	-	-	-	-
20	完形	淡青色	3.4	3.3	2.9	2.8	49	小片	淡青色	-	-	-	-
21	完形	淡青色	3.6	3.45	1.75	1.6	50	小片	淡青色	-	-	-	-
22	完形	淡青色	3.4	3.35	1.75	1.55	51	小片	淡青色	-	-	-	-
23	完形	淡青色	3	2.8	3.6	3.55	52	小片	淡青色	-	-	-	-
24	完形	淡青色	3.6	3.3	2.05	1.8	53	小片	淡青色	-	-	-	-
25	完形	淡青色	3.55	3.15	1.95	-	54	小片	淡青色	-	-	-	-
26	完形	淡青色	3.1	-	1.6	1.4	55	小片	淡青色	-	-	-	-
27	完形	淡青色	2.8	2.45	2.5	2.4	56	小片	淡青色	-	-	-	-

3. 調査結果

全ての個体で、色調や質感、ガラス内部の気泡や不純物の配置は類似している。

色調はHue10BG6/6程度の淡青色を呈す。主な着色因子として、銅イオンが考えられる(肥塚1995)。今回は、材質の化学分析を行ってはいないが、透明感や質感を考慮すれば、基礎ガラスはカリガラスで、銅着色でも微量の鉛を伴うタイプと推定される(大賀2002a・b; 肥塚ほか2010)。

製作技法に関しては、筒状に近い形態の個体や、小口面が孔方向に斜行する個体の存在等から、引き伸ばし技法での製作と推定された。顕微鏡観察では、小玉内の気泡は球状でやや散在ぎみである。しかし、仔細に観察すれば、部分的に孔と平行方向に整列する気泡や不純物、孔と平行方向に伸長・変形した気泡を確認することができ、このことから、引き伸ばし技法での製作と判断される。

なお、全ての個体で、程度の差はあれ管切断後の再加熱調整が施されており、小口面は表面張力で丸みを帯びている。小口面に研磨等で平坦面を作出する個体はない。

個々の資料の計測値は第1表に示した。最大径3mm～4mm程度、最大厚1.5～4mm程度にまとまる(図2)。

4. 本資料の位置づけ

調査結果より、当資料が引き伸ばし技法で製作されていること、素材は銅着色のカリガラスである可能性が高いことが明らかとなった。大賀克彦氏のガラス小玉分類(大賀2002a)では、BDI型の銅着色のものに相当する。

大賀氏がBDI型～BDⅢ型とする、アルカリ珪酸塩ガラスを素材に引き伸ばし技法で製作される単色で約6mm以下のガラス小玉は、Francis氏がIndo-Pacific Beadsと呼ぶもので、その生産地の中心は、南インドから東南アジアにある(Francis 1990)。現在では、弥生～古墳時代において、日本列島ではIPBの製作が行われたとは考えられず、当時期に確認されるIPBは、舶載品であると考えられている(大賀2002b, 2003; 肥塚ほか2010; 谷澤2011)。本資料を「支那製」(中山1922, p.46)とした中山先生の見解は、卓見であった。

銅着色のBDI型ガラス小玉は、弥生時代後期前半～中頃と、古墳時代前期前半に、列島内で多量に確認されることが知られている(大賀2003)。また、弥生後期前半～中頃のものは小口面が研磨されないのに対し、古墳時代前期前半に確認されるものは小口面が平坦に研磨されることが指摘されている(大賀2002b)。また、銅着色のBDI型は、法量が直径2～8mm程度まで分散するが、直径3～4mm程度のものが最も多く確認され(谷澤2011)、当資料もほぼこの範囲にプロットされる(図2)。以上より、当資料は、弥生時代後期



図1 本資料を出土したとされる甕棺
(中山1920a)より改変して転載。縮尺不明だが、本文中に口径一尺八寸許(約54.5cm)との記載あり。

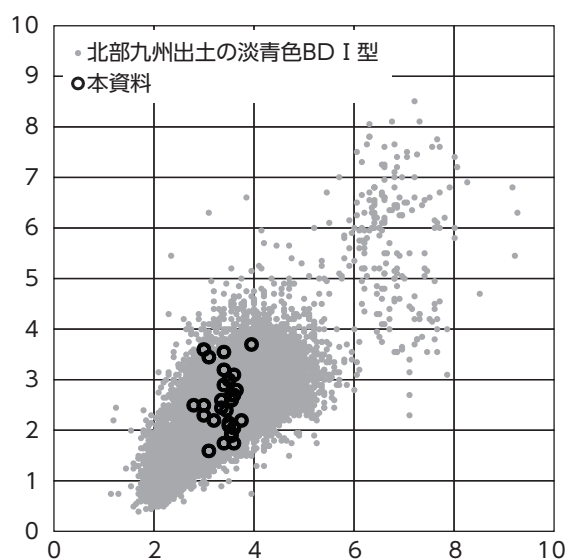


図2 法量の分布
北部九州出土の淡青色BDI型のデータは(谷澤2011)による。

前半～中頃に通有なガラス小玉である。このことは、ガラス小玉を出土したとされる甕棺(図1)が橋口達也氏の甕棺編年(橋口1979)でいうところのKIVb式に相当し、後期前半に位置づけられることとも、整合的である。

最後に、周辺地域でのガラス小玉との比較を行っておきたい。須玖岡本遺跡では、当資料にはほぼ併行する時期と考えられる3つの墓葬からガラス小玉が出土している。E地点14号甕棺墓(38点)(福岡県教育委員会1963)、I地点19号甕棺墓(1269点)・20号甕棺墓(824点)(春日市教育委員会1995)である。後2者は、全て淡青色のBDI型で構成される。E地点14号甕棺墓出土小玉は、実見確認を行えていないが、写真図版を見る限り淡青色のBDI型として大過なさそうである。また、この資料と目されるガラス小玉の材質分析で、銅着色のカリガラス(山崎1987)という結果が出ている。

一方、春日丘陵周辺では、須玖岡本遺跡以外にも、ガラス小玉を伴う埋葬が確認されている。門田辻田遺跡(福岡県教育委員会1978)や、須玖唐梨遺跡(春日市教育委員会1988)では、淡青色のBDI型だけでなく、コバルトで着色された青紺色のBDI型や、BDI型以外のIndo-Pacific Beadsが確認されており、銅着色のBDI型の齊一的なセットが顕著な須玖岡本遺跡での様相とは異なる。須玖唐梨遺跡、門田辻田遺跡は、墓域の形成時期の中心は後期中頃と考えられるが、この差が時期差によるものか、そのほかの要因によるものかは判然としない。

弥生時代後期の北部九州地域では、銅着色のBDI型ガラス小玉自体は、珍しい種類ではないが、ほぼ銅着色のBDI型ガラス小玉のみで構成されるセットは、後期前半の、福岡平野の須玖岡本遺跡と、橋詰遺跡や内畑遺跡などの二日市地峡帯～鳥栖市にかけての地域で特に顕著である(谷澤2011)。以上より、本資料は、須玖岡本遺跡から出土することに、特に違和感のない資料といえる。

おわりに

今回の調査で、本資料について以下のことが明らかとなった。

- ・淡青色を呈し、鉛を伴う銅着色のカリガラスを素材とする可能性が高い。
- ・形状や気泡の配置から、引き伸ばし技法で製作されている。
- ・弥生時代後期前半に通有なガラス小玉である。

今回は、材質等の分析調査は行うことができなかったが、今後も調査を継続し、随時報告を行いたい。

最後になりましたが、調査・報告の機会を与えてくださった、岩永省三先生に感謝申し上げます。また、春日市教育委員会、福岡県教育委員会には、資料の実見でお世話になりました。記して御礼申し上げます。

※参考文献※

- 岩永省三 2008「故岡部養逸氏旧蔵中山平次郎先生関係資料概要報告」『九州大学総合研究博物館研究報告』第6号、107～125頁
- 大賀克彦 2002a「日本列島におけるガラス小玉の変遷」『小羽山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』V）清水町教育委員会、127～145頁
- 大賀克彦 2002b「島根県下のガラス製品」『島根考古学会誌』第19集、99～122頁
- 大賀克彦 2003「紀元三世紀のシナリオ」『風巻神山古墳群』（『清水町埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ）清水町教育委員会、72～90頁
- 春日市教育委員会 1988『須玖唐梨遺跡』（『春日市文化財調査報告書』第19集）
- 春日市教育委員会 1995『須玖岡本遺跡』（『春日市文化財調査報告書』第23集）
- 肥塚隆保 1995「古代珪酸塩ガラスの研究」『奈良文化財研究所創立40周年記念論文集 文化財論叢Ⅱ』同朋舎出版、929～967頁
- 肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその歴史的変遷」『月刊文化財』566号、13～25頁
- 谷澤亜里 2011「弥生時代後期におけるガラス小玉の流通—北部九州地域を中心に—」『九州考古学』第86号、1～39頁
- 中山平次郎 1920a「大甕を發見せる古代遺蹟」『考古学雑誌』第11巻第1号、1～13頁
- 中山平次郎 1920b「大甕を發見せる古代遺蹟（三）」『考古学雑誌』第11巻第4号、25～46頁
- 中山平次郎 1922「明治三十二年に於ける須玖岡本發掘物の出土状態（二）」『考古学雑誌』第12巻11号、31～48頁
- 橋口達也 1979「甕棺の編年的研究」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』XXXI（中）福岡県教育委員会、133～203頁
- 福岡県教育委員会 1963『福岡県須玖・岡本遺跡調査概報』（『福岡県文化財調査報告書』第29集）
- 福岡県教育委員会 1978『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』第9集
- 山崎一雄 1987「日本出土ガラスの化学的研究」『古文化財の科学』思文閣出版、274～330頁
- Francis, P. 1990. Glass Beads in Asia Part2. Indo-Pacific Beads. *Asian Perspectives*, 29-1, pp.1-23.



No.1



No.2



No.3



No.4



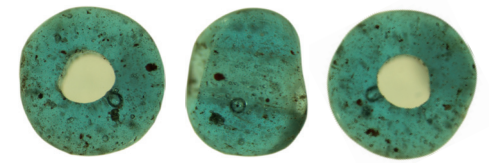
No.5



No.6



No.7



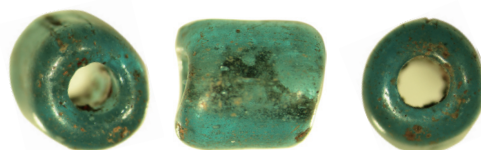
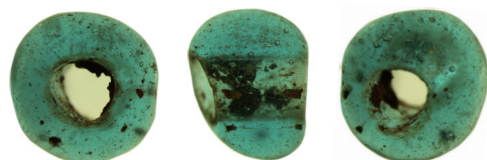
No.8



ガラス小玉顕微鏡写真：No.1～8（約6倍）



No.9



No.10



No.11



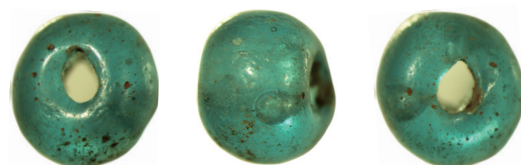
No.12



No.13



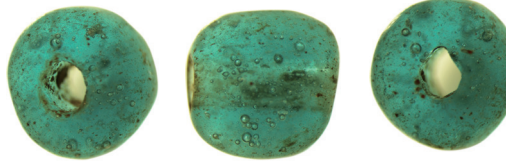
No.14



No.15



No.16



ガラス小玉頭微鏡写真：No.9～16（約6倍）



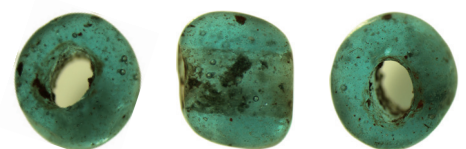
No.17



No.18



No.19



No.20



No.21



No.22



No.23



No.24



ガラス小玉顕微鏡写真：No.17～24（約6倍）



No.25



No.26



No.27



No.28



No.29



No.30



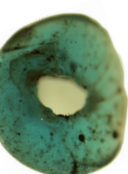
No.31



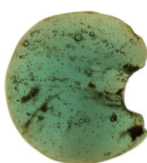
No.32



No.33



No.34



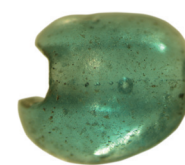
No.35



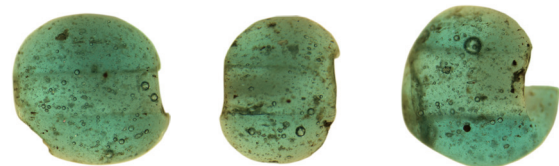
No.36



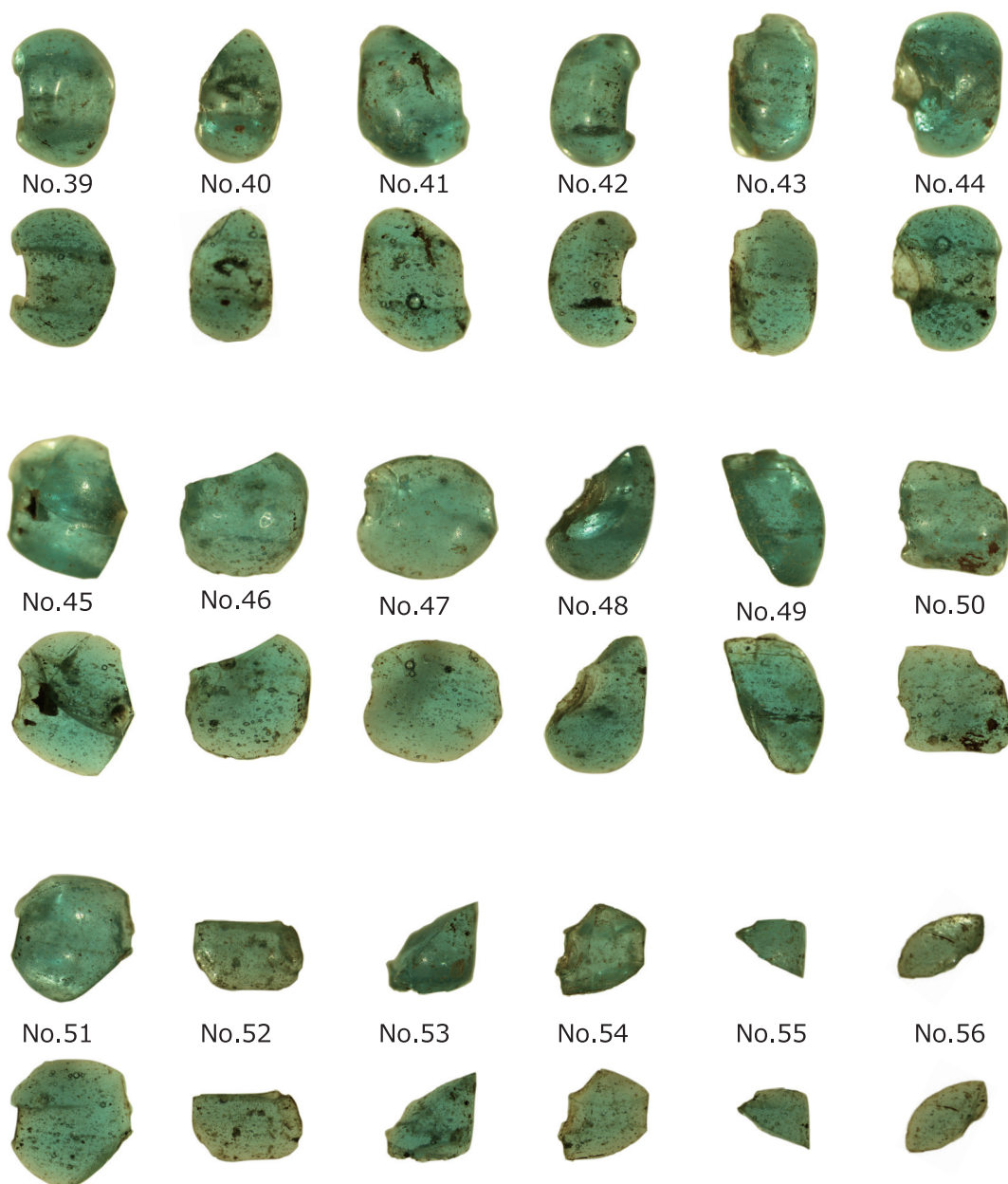
No.37



No.38



ガラス小玉顕微鏡写真：No.25 ～ 38（約6倍）



ガラス小玉顕微鏡写真：No.39～56（約6倍）